

「見よ、彼は彼をどれほど愛していたことか」 クィア理論とホモソーシャル理論によるヨハネ 11:1-44 の読解

小林 昭博*

“Look, How He Loved Him!”
Reading John 11: 1-44 through Queer Theory and Homosocial Theory

Akihiro KOBAYASHI*
(Accepted 15 July 2021)

1. はじめに — 問題設定

ヨハネ 11:1-44 は「ラザロの復活」と呼ばれる有名な聖書テキストである¹⁾。このテキストはイエスの弟子であるベタニアのマルタ、マリア、ラザロの3姉弟の末の弟であるラザロが病気のために亡くなり、イエスが墓に葬られたラザロを甦らせる死者蘇生の奇跡物語である。

歴史批評学的研究によれば、ラザロの復活の物語は、イエスが墓に葬られているラザロを甦らせたように、神がイエスを甦らせるというイエスの死と復活を予示する物語において、マルタがイエスに信仰告白をすることによって、イエスが「キリスト」および「神の子」であることを顕示するヨハネ福音書のクライマックスの場面として理解されている。確かに、ラザロの復活の物語における「マルタの信仰告白」が共観福音書における「ペトロの信仰告白」(マルコ 8:27-30 / マタイ 16:13-20 / ルカ 9:18-21) に相当する最重要のテキストであることを考えると、ラザロの復活の物語におけるマルタの信仰告白をヨハネ福音書のクライマックスとして理解する歴史批評学の見解は説得的である。

だが、このような歴史批評学の見解に対して、近年のクィア理論を用いた聖書解釈は、ラザロの復活の物語においてイエスがラザロを「愛している」

(φιλέω/ἀγαπάω) ことが3度繰り返して強調され、特にヨハネ 11:36 では「それゆえ、ユダヤ人たちが言った、『ご覧なさい、彼 [=イエス] は彼 [=ラザロ] をどれほど愛していたことか』」(ἐλεγον οὖν οἱ Ἰουδαῖοι· ἶδε πῶς ἐφίλει αὐτόν) とイエスのラザロに対する深い愛が強調されていることから、その場にいた人々がイエスのラザロに対する深い愛を感じ取っていたことをクィアに読み解き、イエスとラザロの間に「同性間恋愛」^{ホモエロティシズム}を読み取ろうとする試みがなされている。確かに、ヨハネがマルタの信仰告白をその福音書のクライマックスとして提示するためにラザロの復活の物語を描いているのだとすれば、イエスのラザロに対する「愛」を3度も繰り返して強調することは却って奇異^{クィア}である。したがって、現代的な同性愛のフィルターを通してラザロの復活の物語を再読すれば、イエスとラザロの間に同性間恋愛^{ホモエロティシズム}を見出すことも十分に蓋然性のあることだと言い得るのである。

しかし、ヨハネ福音書がイエスとラザロの同性間恋愛^{ホモエロティシズム}を描くことを目的としていたのであれば、ふたりの「愛」(恋愛)をラザロの復活の物語の文脈に置いて描く必要があったとは思えない。その意味では、ラザロの復活の物語がイエスとラザロというふたりの男性間の「恋愛」^{ホモエロティシズム}(同性間恋愛)を主題として創作されたとは考えられない。では、なぜイエスの復活を予兆する死者蘇生の奇跡物語において、イエスがラザロを「愛している」ことが3度も繰り返して強調される必要があったのだろうか。一見すると、従来の「歴史批評学による読解」と新たに提唱されている「クィア理論による読解」は、相互に矛盾する「読解」(解釈)に映ずるかもしれない。

¹⁾ 「ラザロの復活」はドストエフスキー『罪と罰』第4部第4章において、ソーニャがラスコーリニコフに読み聞かせる聖書テキストとしても知られている。詳しくは、フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー『罪と罰2』(光文社古典新訳文庫) 亀山郁夫訳, 光文社, 2009年, 295-335頁参照。

* 酪農学園大学農食環境学群循環農学類キリスト教応用倫理学研究室
Christian Studies and Applied Ethics, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

だが、私見では、ここに「ホモソーシャリティ理論」を援用することによって双方の解釈を結びつけることが可能となり、双方の解釈が両立し得ないかに思える問題をも繕うことができると考えられる。

そこで、本論文では従来の「歴史批評学」の知見を活かしつつ、そこに「クイア理論」と「ホモソーシャリティ理論」を援用してラザロの復活の物語を再読し、ヨハネ福音書がラザロの復活の物語を描くうえで、イエスが弟子であるラザロを「愛している」ことが強調されている意味を詳らかにすることを試みたい。

2. 歴史批評学によるヨハネ 11：1-44 の読解²⁾

2.1. ヨハネ 11：1-44 の構成と内容

ヨハネ 11：1-44 の大枠での構成は以下の3部分から成る³⁾。

- (1) 「ラザロの死」(11：1-16)
- (2) 「復活に関する対話」(11：17-27)
- (3) 「ラザロの復活」(11：28-44)

(1) 「ラザロの死」(11：1-16) のテキストは物語の全体のプロローグであり、1-5 節の「導入の説明」と6-16 節の「イエスと弟子の対話」によって構成されている⁴⁾。(2) 「復活に関する対話」(11：17-27) のテキストはイエスとマルタの対話として描かれており、17-19 節の「導入の説明」と20-27 節の「イエスとマルタの対話」によって構成されている⁵⁾。(3) 「ラザロの復活」(11：28-44) のテキストはイエスがラザロを甦らせる死者蘇生の奇跡物語であり、28-31 節の「イエスのマリアへの呼びかけ」、32-37

節の「イエスとマリアの対面」、38-44 節の「ラザロの甦りの奇跡」によって構成されている⁶⁾。

2.2. 「ラザロの死」(11：1-16)

1-5 節の「導入の説明」のテキストは、ベタニアのマルタ、マリア、ラザロの3姉弟の紹介とイエスとの関係が描かれている。1-2 節は病の床に伏すラザロとその姉であるマリア⁷⁾とマルタを紹介する導入の記述であり⁸⁾、3-5 節はラザロを心配して使いを送ってイエスに助けを求めるマリアとマルタの懇願とイエスの反応およびイエスと三姉弟との関係性が示されている⁹⁾。

6-16 節の「イエスと弟子の対話」のテキストは、真理を理解することのできないイエスの弟子たちの無理解が描かれている。6 節はこのテキストの導入部であり¹⁰⁾、7-10 節はベタニアに行くためにユダヤに戻る決断をしたイエスが、「昼と夜」の隠喩を語ることによって、身の危険が迫りつつあってもまだ残された時間があることを弟子たちに伝えることで、ラザロのもとに向かう自らの決意が固いことを弟子たちに示す記述である¹¹⁾。そして、11-16 節はラザロの死と復活をめぐるイエスと弟子たちの対話であり、ラザロの復活がイエスの復活の予兆であるという真理を理解することのできないトマスの無理

⁶⁾ Wengst, *Johannesevangelium*, 346f 参照。

⁷⁾ ベタニアのマリアの名は厳密には「マリア」(Μαρία)ではなく、「マリアム」(Μαριάμ)と綴られており、これはヘブライ語名の「ミリヤム/ミリアム」(מִרְיָם)のアラム語形「マルヤム」(ܡܪܝܡ)をギリシャ語化したものである(Wengst, *Johannesevangelium*, 334 Anm. 614)。なお、マリアムについては、田川建三『新約聖書 訳と註5—ヨハネ福音書』作品社、2013年、495頁、同『新約聖書 訳と註2上—ルカ福音書』作品社、2011年、101-102頁を参照。

⁸⁾ 1節は「ある病人がいた。ベタニア出身のラザロであり、マリアと彼女の姉妹であるマルタの村〔であるベタニア〕の出であった」(Ἦν δὲ τις ἀσθενῶν, Λάζαρος ἀπὸ Βηθανίας, ἐκ τῆς κόμης Μαρίας καὶ Μάρθας τῆς ἀδελφῆς αὐτῆς) というテキストである。ギリシャ語の原文では、最初に病人であるラザロがベタニア出身であることが説明され、その後でベタニアがラザロの姉妹であるマリアとマルタの村であるとの説明が付加されているのだが(口語訳、新改訳2017参照)、新共同訳と協会共同訳はラザロの名を最後に訳出している。新共同訳と協会共同訳の翻訳の方が日本語としては読みやすいのだが、その訳ではこの物語の主役がラザロであることがいささかぼやけてしまっている。

⁹⁾ Michael Theobald, *Das Evangelium nach Johannes, Kapitel 1-12*, RNT, Regensburg: Pustet, 2009, 712 の要約を参考にした。

¹⁰⁾ Christian Dietzfelbinger, *Das Evangelium nach Johannes, 1-2*, ZBK 4/1-2 in einem Band, Zürich: Theologische Verlag, 2004, Bd. 1, 341.

¹¹⁾ 「昼と夜」の隠喩は、すでにヨハネ 9：4-5 でも語られており(Dietzfelbinger, *Das Evangelium nach Johannes*, Bd. 1, 341f.; Theobald, *Das Evangelium nach Johannes*, 726;

²⁾ 「ラザロの復活」に関する一連の物語は、ヨハネ 11 章全体(11：1-57) — ないし 11 章から 12 章前半(11：1-12：11) — にまで及んでいるが、クイア理論とホモソーシャリティ理論を用いた「ラザロの復活」の物語の読解を試みる本論文にとって重要なのは、11：1-44 であることから、11：45-57 — ないし 11：45-12：11 — には言及しないことを予め断っておく。

³⁾ 大枠での構成と断っているように、ここでは Klaus Wengst, *Das Johannesevangelium*, ThKNT 4, Neuausgabe in einem Band, Stuttgart: Kohlhammer, 2019, 333-351 が示す大枠の構成を参考にした。なお、クラウス・ヴェングストの注解書では、11：17-27 のテキストの表記が、目次、表題、欄外見出しにおいて 11：17-17 と誤植されている。

⁴⁾ Jean Zumstein, *Das Johannesevangelium*, KEK 2, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2016, 413 参照。なお、上注 3 で参考にしたヴェングストの注解書では、このテキストは 1-3 節「ラザロの病気とその姉妹たちの助けを求める訴え」と 4-16 節「病人の死による状況の悪化」に区分されている(Wengst, *Johannesevangelium*, 334-340)。

⁵⁾ Wengst, *Johannesevangelium*, 340f 参照。

解が、弟子たち全体の真理に対する無理解をも表す内容として記されている¹²⁾。

2.3. 「復活に関する対話」(11：17-27)

17-19 節の「導入の説明」のテキストは、17 節がラザロの死の確認、18 節がベタニアの地理的説明、そして 19 節がマルタとマリアの悲痛の描写である。これらの一連の描写によって、後続する「イエスとマルタの対話」(20-27 節)の状況設定が提供されている¹³⁾。

20-27 節の「イエスとマルタの対話」のテキストは、20 節がイエスを迎えに行くマルタの描写、21-22 節がマルタのイエスに対する難詰、23-24 節が復活をめぐるマルタとイエスの対話、25-26 節が復活と生命としてのイエスの顕示、27 節がマルタの信仰告白である。このテキストにおいて、マルタはイエスとの対話によって真理を認識する道へと一步一步その歩みを進め、今、ここでイエスを「キリスト」および「神の子」と信じる信仰告白に到達している¹⁴⁾。

「復活に関する対話」(11：17-27)において、ヨハネ福音書が描く「マルタの信仰告白」は共観福音書における「ペトロの信仰告白」(マルコ 8：27-30/マタイ 16：13-20/ルカ 9：18-21)に相当する最重要の記述である¹⁵⁾。その意味において、ラザロの復活の物語の真のクライマックスは——イエスがラザロを甦らせる奇跡ではなく——マルタの信仰告白にあると言えよう¹⁶⁾。

Zumstein, *Das Johannesevangelium*, 421; Wengst, *Johannesevangelium*, 337), 11：7-10のテキストの後では 12：35-36でも言及されていることから分かるように (Dietzfelbinger, *op. cit.*, 341f.; Theobald, *op. cit.*, 728), イエスの受難へと至る危機が切迫していることを示す表象である。

¹²⁾ Dietzfelbinger, *Das Evangelium nach Johannes*, Bd. 1, 343 参照。

¹³⁾ Zumstein, *Das Johannesevangelium*, 424 参照。

¹⁴⁾ Theobald, *Das Evangelium nach Johannes*, 733 参照。

¹⁵⁾ 大貫隆『世の光イエス——福音書のイエス・キリスト④ヨハネによる福音書』講談社、1984年、84-85頁参照。

¹⁶⁾ ヨハネ 6：68-69には共観福音書の「ペトロの信仰告白」を彷彿とさせる内容が記されており、おそらくヨハネ福音書は共観福音書の「ペトロの信仰告白」を知っていたと思われる。なお、大貫隆「ヨハネによる福音書」、大貫隆/山内眞監修『新版 総説 新約聖書』日本キリスト教団出版局、2003年、[134-159頁] 139-141頁によれば、ヨハネ福音書はマルコ福音書を前提する文書だと見なされており、したがって大貫はヨハネの「ペトロの信仰告白」の記述はマルコ福音書から採られたものだと見なしているものと思われる (大貫『世の光イエス』85頁をも参照)。なお、ジャン・ズムスタンによれば、ヨハネ学派はマルコとルカを知っていたが、マタイを知らなかったとしており (Zumstein, *Das Johannesevangelium*, 44-47 参照)、その場

2.4. 「ラザロの復活」(11：28-44)

28-31 節の「イエスのマリアへの呼びかけ」のテキストは、28 節がマルタを通してイエスの呼びかけを知るマリアの描写、29-31 節が急いでイエスのもとに赴くマリアの姿をその内容とする。このテキストは悲痛に暮れるマリアが意を決してイエスのもとに赴く姿を描くことによって、後続する「イエスとマリアの対面」(32-37 節)においてなされるマリアとイエスの対話の場を準備している¹⁷⁾。

32-37 節の「イエスとマリアの対面」のテキストは、32 節がマリアのイエスに対する難詰、33-35 節がマリアと周囲の人たちが泣き崩れる姿に影響され、激しく混乱して涙を流すイエスの描写、36 節がイエスが混乱する姿からラザロに対するイエスの愛を知った人々が驚嘆を吐露する場面、そして 37 節がイエスの無力さに対する皮肉である。このテキストはイエスとマリアが対面し、ラザロの死とマリアの悲痛に感情を揺り動かされた人間イエスの姿が描き出されている¹⁸⁾。

38-44 節の「ラザロの甦りの奇跡」のテキストは、38-41 節 a が墓の前でのイエスとマルタの対話と墓の開放の描写であり、41b-44 節がイエスの祈りとラザロの甦りの奇跡の描写である¹⁹⁾。このテキストはイエスがラザロを甦らせるという——マルタの信仰告白を除くと——ラザロの復活の奇跡物語の中心に位置づけられる²⁰⁾。

2.5. 歴史批評学によるヨハネ 11：3, 5, 36 の読解

ここまで確認してきたことから分かるように、歴史批評学による読解では、ヨハネ 11：1-44 のラザロの復活の物語はイエスが墓に葬られたラザロを甦らせる死者蘇生の奇跡がイエスの復活の予兆であり、ラザロの復活を見る前に、マルタが今、ここでイエスを「キリスト」および「神の子」として信じる信仰告白をしていることにこの物語のクライマックスがあると理解されている²¹⁾。このようなマルタの姿は、ヨハネ 11：10 においてイエスの真理を理解

合にはヨハネはマルコとルカの「ペトロの信仰告白」の双方を知っていたことになる。

¹⁷⁾ Zumstein, *Das Johannesevangelium*, 429 参照。

¹⁸⁾ 田川『新約聖書 訳と註 5』512-516 頁参照。

¹⁹⁾ Theobald, *Das Evangelium nach Johannes*, 712, 740 参照。

²⁰⁾ Theobald, *Das Evangelium nach Johannes*, 740; Zumstein, *Das Johannesevangelium*, 431 参照。

²¹⁾ 大貫『世の光イエス』84-85 頁, Theobald, *Das Evangelium nach Johannes*, 733; 田川『新約聖書 訳と註 5』503-507 頁参照。

することのできなかつたトマスの姿と対照的に描かれており、これはまさにヨハネ 20:29 において復活のイエスがトマスに向かって言う「見ないで信じる者は幸いである」(μακάριοι οἱ μὴ ἰδόντες καὶ πιστεύσαντες) との理想的な信仰者の姿をマルタがすでに先取りして体現していることを言い表している。

このようなヨハネ 11:1-44 のテキストにおいて、イエスのラザロに対する愛に言及するのは、11:3, 5, 36 の 3 テキストだが、先に示した読解からも窺えるように、歴史批評学による読解では、イエスのラザロに対する愛に特別に注意が向けられることはなく、ごく短く付随的に触れるか、神学的な教説を引き出すかのいずれかである。したがって、ヨハネ 11:3, 5, 36 におけるイエスのラザロに対する愛の理解については、単にイエスとラザロの間の近しさや親しさを表しているとする理解か²²⁾、イエスを信じる者に顕示される神の愛の教説として理解されるかのいずれかである²³⁾。

だが、むしろこのような歴史批評学による読解では、ヨハネ 11:1-44 のラザロの復活の物語においてイエスのラザロに対する愛が 3 度繰り返して語られ、イエスの愛がとりわけ強調されていることの意味を説明することができないというアポリアに迷い込んでしまう。そこで、このテキストにおける愛の強調を正面切って論じることのできるクシア理論による読解へと議論を進める必要がある。

3. クシア理論によるヨハネ 11:1-44 の読解²⁴⁾

3.1. クシア理論によるヨハネ 11:1-44 の読解

クシア理論を用いた聖書解釈は、ヨハネ 11:1-44 のテキストにおいてイエスがラザロを 3 度「愛している (φιλέω/ἀγαπάω)」(ヨハネ 11:3, 5, 36) ことが繰り返して強調されていることをクシアに読み解

き、イエスとラザロのとの間に同性間恋愛を読み取ろうとする試みをしてきた²⁵⁾。すでに、ヨハネ 11:1-44 のテキストの全体像は確認しているので、ここでは歴史批評学による議論を前提に据えて、クシア理論によるイエスのラザロに対する愛の読解に議論を集中する。

ヨハネ 11:3 では、マルタとマリアが遣わした使者の口を通して、イエスにとってラザロが「あなたが愛している者」(ὁς φιλεῖς [ὄν φιλεῖς]) と言われている。11:5 ではイエスがマルタとマリアとラザロの 3 人を「愛していた」(ἠγάπα) ことが描写されている。そして、11:36 では周囲にいた者たちの口を通して、イエスがラザロを「どれほど愛していたことか」(πῶς ἐφίλει) と語られている²⁶⁾。このように 11:1-44 のテキストではイエスのラザロに対する「愛」が 3 度繰り返されて強調されている。では、実際にヨハネ 11:3, 5, 36 の 3 テキストを取り上げて、クシア理論を用いた読解を試みよう。

3.2. ヨハネ 11:3 の読解

まずは、ヨハネ 11:3 のギリシャ語テキストと翻訳(私訳)を提示する。

【ヨハネ 11:3】

ἀπέστειλαν οὖν αἱ ἀδελφαὶ πρὸς αὐτὸν λέγουσαι· κύριε, ἴδε ὃν φιλεῖς ἀσθενεῖ.

それで姉たち [=マルタとマリア] は彼 [=イエス] のもとに使者を送って、言った、「主よ、お聞きください、あなたが愛している者が病気です」。

ヨハネ 11:3 はラザロの病状をイエスに伝えるときに、「ラザロが病気です」や「弟が病気です」ではなく、「あなたの愛する者が病気です」という「愛」

²²⁾ Zumstein, *Das Johannevangelium*, 418, 419f., 431 参照。

²³⁾ 伊吹雄『ヨハネ福音書注解Ⅱ』知泉書房、2007年、352, 353-354, 367頁参照。

²⁴⁾ クシア理論および同理論を用いた聖書解釈については、拙論「クシア化する家族——マルコ 3:20-21, 31-35 におけるイエスの家族観」『神学研究』60号、関西学院大学神学研究会、2013年、13-24頁、同「『わたしを愛しているか』——クシア理論とホモソーシャルティ理論によるヨハネ 21:15-17 の読解」『日本の神学』55号、日本基督教学会、2016年、39-66頁、同「『イエスとクシア』から『クシアなイエス』へ——クシア理論を用いた聖書解釈の新たな地平」『福音と世界』73巻7号、新教出版社、2018年7月号、18-23頁、同「イエスの胸に横たわる弟子——クシア理論とホモソーシャルティ理論によるヨハネ 13章 21-30節の読解」、『日本新約学会編『イエスから初期キリスト教へ——新約思想とその展開(青野太潮先生献呈論文集)』リトン、2019年、189-210頁参照。

²⁵⁾ Theodore W. Jennings, Jr., *The Man Jesus Loved: Homeroitic Narratives from the New Testament*, Cleveland, Ohio: Pilgrim Press, 2003, 51f.; Dale B. Martin, *Sex and the Single Savior: Gender and Sexuality in Biblical Interpretation*, Louisville/London, Westminster John Knox Press, 2006, 99f. 参照。

²⁶⁾ これらの 3 テキストにおいて、「愛する」を意味する動詞として、φιλέω と ἀγαπάω の 2 種類が使われている。つまり、3 節には φιλέω、5 節には ἀγαπάω、36 には φιλέω が用いられているということである。だが、ヨハネ福音書では同じ意味を表す動詞を入れ替えて使うことが多く(「知る/分かる (οἶδα/γινώσκω)」「飼う/牧する (βόσκω/ποιμαίνω)」「小羊/羊 (ἀρνίον/πρόβατον)」)、このテキストにおいて φιλέω と ἀγαπάω は交換可能な語として用いられていると見なして差し支えない。詳しくは、拙論「『わたしを愛しているか』」60頁注16参照。

を強調する描写がなされている²⁷⁾。このように「ラザロ」という名ではなく、「あなたの愛する者／あなたの愛する男」(ὁς φιλεῖς [ὄν φιλεῖς]) という特別な表現が使われていることをクィアに読み解けば、「愛する者／愛する男」という表現からイエスとラザロの間の同性間恋愛を読み取ることが可能である。なぜなら、もしこれが男性のラザロではなく、ベタニアのマリアやマグダラのマリアといった女性を「あなたの愛する者／あなたの愛する女」(ἡ φιλεῖς) と呼んでいたとすれば、現代的な異性愛のフィルターを通して、イエスとその女性との間に恋愛関係(異性間恋愛)が想定されることは想像に難くないからである²⁸⁾。

3.3. ヨハネ 11：5 の読解

次に、ヨハネ 11：5 のギリシャ語テキストと翻訳(私訳)を提示する。

【ヨハネ 11：5】

ἡγάπα δὲ ὁ Ἰησοῦς τὴν Μάρθαν καὶ τὴν ἀδελφὴν αὐτῆς καὶ τὸν Λάζαρον.

イエスはマルタと彼女の妹 [=マリア] とラザロを愛していた。

このテキストは物語の語り手の語りであり、ここではマルタとマリアとラザロの3姉弟の全員がイエスの愛の対象として名をあげられている。このテキストの場合は、イエスが男性のラザロだけを愛していると言っているわけではなく、したがってここからイエスとラザロとの恋愛関係(同性間恋愛)を読み取るとは難しいかに思える。だが、この物語を注意深く読み解くと、ラザロの復活の物語からは「イエスとラザロ」というふたりの男性の恋愛関係(同性間恋愛)だけではなく、「イエスとマルタ」や「イエスとマリア」の間の恋愛関係(異性間恋愛)を想像させる親密な関係を想定することも可能だと思われる。

そして、「イエス」と「ラザロ、マルタ、マリア」の3姉弟の親密さはラザロの復活の場面の直後に置かれている「香油注ぎ」(ヨハネ 12：1-8)の場面か

らも読み取ることが可能である。この場面はラザロ、マルタ、マリアの家に招かれたイエスと3姉弟との間の関係が記されている興味深いテキストである。ヨハネ 12：1-8のテキストにおいて、マルタはイエスに給仕し(12：2a)、ラザロはイエスと一緒に食事の席に横たわり(12：2b)、マリアはイエスの足を香油で濡らして自らの髪で拭いている(12：3)。

イエスに給仕するマリアはイエスの世話を焼いているようであり²⁹⁾、マルタとイエスとの間に異性間恋愛を読み取ることが可能である。また、イエスと一緒に食事の席に横たわるラザロは最後の晩餐の席でイエスの胸に横たわるイエスが愛した弟子を彷彿とさせ、イエスとイエスが愛した弟子の同性間恋愛がラザロとイエスとの間で先取りされているかのようである³⁰⁾。そして、マリアが香油でイエスの足を濡らし、自らの髪で拭う場面は扇情的であり、マリアとイエスとの間に異性間恋愛を読み取るとはさほど難しいことではない³¹⁾。

このような「エロトフォビア」や「ホモフォビア」から自由な解釈を試みれば、イエスがマルタとマリアとラザロの3姉弟と異性間恋愛や同性間恋愛の関係にあったということをクィアに読み取ることが決して不可能ではない。

3.4. ヨハネ 11：36 の読解

最後に、ヨハネ 11：36 のギリシャ語テキストと翻訳(私訳)を提示する。

²⁹⁾ もちろん、女性に男性に対する「給仕」や「世話」を読み取るとは、ジェンダー・バイアスでもあるのだが、「エロトフォビア」(性嫌悪・性愛嫌悪)によって、イエスに「精神的・肉体的な情動を伴うエロース(恋愛)を読み取るとを嫌悪することによって、イエス・聖書・キリスト教は「聖なるもの」でなければならないとして、恋愛や性とは一切関係のない無菌室のような空間にイエス・聖書・キリスト教を置こうとする流れに対する批判から、敢えてイエスの世話をするマルタを強調することを試みた。なお、エロトフォビアの問題に関しては、拙論『「イエスとクィア」から「クィアなイエス」へ』21-22頁参照。

³⁰⁾ ラザロがイエスと一緒に食事の席に横たわっていることから、ラザロとイエスが愛した弟子を同一視しようとする意見も見られる(山口里子『虹は私たちの間に——性と生の正義に向けて』新教出版社、2008年、267-273頁参照)。

³¹⁾ なお、旧約聖書においてヘブライ語の「足」(רַגְלַי)が「男性器」の婉曲表現として使われていることからすると(土師3：24、サムエル上24：4、列王下18：27=イザヤ36：12)、この物語はより扇情的な意味合いを帯びてくると言えるだろう。ヘブライ語のרַגְלַיが「男性器」および「女性器」の婉曲表現として用いられることについては、Francis Brown/Samuel R. Driver/Charles A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament: With an Appendix containing the Biblical Aramaic, based on the Lexicon of William Gesenius*, Oxford: At the Clarendon Press, 1907, 1952, 920参照。

²⁷⁾ ヨハネ 11：21ではマルタはラザロを「わたしの弟」(ἀδελφός μου)と呼んでおり、同様にヨハネ 11：32においてマリアはラザロを「わたしの弟」(μου ὁ ἀδελφός)と呼んでいることを考えると、ヨハネ 11：3の「あなたが愛している者」(ὁς φιλεῖς [ὄν φιλεῖς])はイエスのラザロに対する「愛」が強調されていると理解することが可能である。

²⁸⁾ Jennings, Jr., *The Man Jesus Loved*, 50; Martin, *Sex and the Single Savior*, 99f参照。

【ヨハネ 11：36】

ἔλεγον οὖν οἱ Ἰουδαῖοι· ἴδε πῶς ἐφίλει αὐτόν.

それゆえ、ユダヤ人たちが言った、「見よ、彼〔＝イエス〕は彼〔＝ラザロ〕をどれほど愛していたことか」。

ヨハネ 11：36 は、ラザロの死を悼んでいた者たちがラザロの死を実感して取り乱したイエスの姿を目の当たりにして吐露した科白である。このテキストはイエスがラザロを深く愛していたことをストレートに表現しており、その場にいた人々がイエスのラザロに対する深い愛を感じ取っていたことをクシアホモエロティシズムに読み解き、イエスとラザロとの間の恋愛関係ホモエロティシズム（同性間恋愛）を読み取ることが可能である。

このようなクシアな読解に対してもテキストが開かれていると見なし得るのは、— ヨハネ 11：3 の読解の繰り返しになるが— この場面がもし男性のラザロではなく、ベタニアのマリアやマグダラのマリアといった女性の死を実感して取り乱すイエスに向かって、「見よ、彼は彼女をどれほど愛していたことか」との科白が吐露されていたとすれば、現代的な異性愛のフィルターを通して、イエスとその女性との間に恋愛関係ヘテロエロティシズム（異性間恋愛）を容易に読み取っていたと考えられるからである³²⁾。

3.5. クシア理論によるヨハネ 11：3, 5, 36 の読解

ここまで論じてきたことから分かるように、ヨハネ 11：3, 5, 36 のテキストをクシアに読み解けば、イエスとラザロとの間に同性間恋愛ホモエロティシズムを読み取ることが十分に可能である。だが、このようなクシア理論による読解では、イエスのラザロに対する「愛」ホモエロティシズム（同性間恋愛）がなぜラザロの復活の物語において強調されているのかを説明することができないというアポリアに行き当たってしまう。そこで、「歴史批評学による読解」と「クシア理論による読解」を有機的に結びつけることを可能とする「ホモソーシャルリティ理論による読解」へと議論を進めたい³³⁾。

³²⁾ Jennings, Jr., *The Man Jesus Loved*, 50; Martin, *Sex and the Single Savior*, 99f 参照。

³³⁾ なお、近年のクシア理論を用いた聖書解釈では、ラザロの復活の物語はイエスに呼びかけられて墓から出て来て生命を取り戻すラザロの姿をゲイ男性がイエスに呼びかけられて「カミングアウト」して生命を取り戻す姿になぞらえて再読することが試みられている (Chris Glaser, *Coming out as Sacrament*, Louisville: Westminster John Knox Press, 1998, 10f.; Benjamin Perkins, *Coming Out, Lazarus's and Ours: Queer Reflectory of a Psychospiritual, Political Journey*, in: Robert E. Goss/Mona West (eds.),

4. ホモソーシャルリティ理論によるヨハネ 11：1-44 の読解³⁴⁾

4.1. 古代ギリシャの哲学者の師弟愛 — ホモソーシャルな連続体

ここではホモソーシャルリティ理論のモデルとして、古代ギリシャ・ローマ世界に通底する古典期ギリシャの哲学者に表象される師弟愛を措定し、イエスとラザロの関係を古代ギリシャ世界の「同性間恋愛」ホモエロティシズムとして知られる「少年愛」パイドラスティアに社会的に位置づけて再読することによって、歴史批評学による読解のアポリアとクシア理論による読解のアポリアから抜け出すことを試みたい。

すでに論じたように、歴史批評学による読解のアポリアとクシア理論による読解のアポリアは、「マルタの信仰告白」によってクライマックスを迎える死者蘇生の奇跡物語である「ラザロの復活」の物語において、イエスの復活を予示するために甦らされるラザロに対して、イエスの「愛」ホモエロティシズム（同性間恋愛）がこれほどまでに強調されていることの意味を説明できないことにある。だが、ホモソーシャルリティ理論を援用して、イエスとラザロの関係性を再読すれば、このふたりの男性がギリシャ哲学者の師弟愛が体現する「ホモソーシャルリティ」(homosociality) と「ホモエロティシズム」(homoeroticism) を共存させる「ホモソーシャルな連続体」(homosocial continuum) を構成していることは明らかである³⁵⁾。つまり、プラトンの『饗宴』においてアリストデモスが紹介するパウサニアスのエロース讃美の演説のなかで、「少年愛」(παιδεραστία) と「哲学／愛智」(φιλοσοφία) とが結び合わされていることから明らかのように³⁶⁾、古代ギリシャの哲学者の師弟愛においては哲学的真理の授与と恋愛の受諾とが一体化し、「恋愛する者」(ἐραστής) と「恋愛される者／稚児」(ἐρώμενος/παιδικά) が「真理」と「愛」(恋愛)

Take Back the Word: A Queer Reading of the Bible, Cleveland, OH: The Pilgrim Press, 2000, 196-205; Robert E. Goss, John, in: Deryn Guest/Robert E. Goss/Mona West/Thomas Bohache (eds.), *The Queer Bible Commentary*, London: SCM Press, 2006, [548-565] 554f.)

³⁴⁾ ホモソーシャルリティ理論および同理論を用いた聖書解釈については、拙論『わたしを愛しているか』39-66 頁、同「イエスの胸に横たわる弟子」189-210 頁参照。

³⁵⁾ イヴ・K・セジウィック『男同士の絆 — イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗／亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001 年、5-7 頁 (Eve K. Sedgwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Gender and Culture, New York: Columbia University Press, 1985, 30th anniversary edition, 2016, 4-5) 参照。

³⁶⁾ プラトン『饗宴』184D-E。

を共有し³⁷⁾、「ホモソーシャルな連続体」を構成していたからである³⁸⁾。

4.2. ホモソーシャルリティ理論によるヨハネ 11:1-44 の読解

そして、「ホモソーシャルな連続体」はヨハネ福音書が成立したと目される 1 世紀末から 2 世紀前半のローマ時代にも存在していたのであり³⁹⁾、ヨハネ福音書もまた「ホモソーシャルな連続体」を共有していたと考えられるのである⁴⁰⁾。その意味では、ヨハネ 11:1-44 のラザロの復活の物語において、師であるイエスによって復活させられる弟子のラザロに対してイエスの「愛」が 3 度繰り返して強調されているのは、言わば自明の理だとさえ言えるのである。

4.3. ホモソーシャルリティ理論によるヨハネ 11:3, 5, 36 の読解

では、この理解を応用してヨハネ 11:3, 5, 36 のテキストを読み解いてみよう。

ヨハネ 11:3 において、ラザロが「あなたが愛している者／あなたが愛している男」(ὁς φιλεῖς [ὁν φιλεῖς]) と呼ばれているのは、イエスとラザロが「少年愛」と「師弟愛」が結合した最高最善の愛の絆によって結び合わされていることを示している。また、ヨハネ 11:5 において、マルタとマリアと並んでラザロが「イエスが愛していた」(ἠγάπα δὲ ὁ Ἰησοῦς) と言われているのは、イエスとマルタ、マリアが「異性間恋愛」と「師弟愛」とで結び合わされているように、イエスとラザロは「少年愛」と「師弟愛」が結合した最高最善の愛の絆で結び合わされているということである。そして、ヨハネ 11:36 に

において、ラザロの死を実感して取り乱したイエスに向かって、その場にいた人々が「彼 [= イエス] は彼 [= ラザロ] をどれほど愛していたことか」(ἔλεγον οὖν οἱ Ἰουδαῖοι· ἴδε πῶς ἐφίλει αὐτόν) と吐露し、イエスのラザロに対する深い愛を感じ取っているのは、イエスとラザロが「少年愛」と「師弟愛」が結合した最高最善の愛の絆によって結び合わされていることを如実に示していると言えるのである。

このようにホモソーシャルリティ理論を援用してヨハネ 11:3, 5, 36 のテキストを読解すれば、これらの 3 テキストにおいてイエスのラザロに対する「愛」が 3 度繰り返して強調されているのは、このふたりの男性がギリシャ哲学者の師弟愛が体现する「ホモソーシャルリティ」と「ホモエロティシズム」を共存させる「ホモソーシャルな連続体」を構成していたからにはほかならないと言い得るのである。

5. ま と め

以上の考察の結果、ヨハネ 11:1-44 のラザロの復活の物語において、イエスとラザロは「復活」と「愛」というキリスト教の「秘儀」^{ミューステリオン}を共有する最高最善の師弟愛で結び合わされているということが明らかとなった。つまり、イエスを信じてイエスの復活に与る者がイエスの愛に与るのは、ギリシャ哲学者の師弟愛をイエスと弟子の師弟愛の最高最善のモデルとするヨハネ福音書においては、イエスとラザロが最高最善の愛を共有する師弟の絆で結ばれていることを表しているということである。

そのように考えると、ヨハネ 11:1-44 のラザロの復活の物語において、ヨハネ 11:3, 5, 36 でイエスがラザロを愛していることが 3 度繰り返され、それがとりわけ 11:36 において「見よ、彼 [= イエス] は彼 [= ラザロ] をどれほど愛していたことか」というイエスのラザロに対する深い愛に対する讃嘆として吐露されているのも決して不思議なことではない。

※ 本論文は JSPS 科研費 JP17K02622 の助成を受けたものである。

³⁷⁾ ケネス・J・ドゥヴァー 『古代ギリシアの同性愛 新版』中務哲郎／下田立行訳、青土社、2007 年、29 頁 (Kenneth J. Dover, *Greek Homosexuality*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1978, updated and with a new postscript, 1989, 12), セジウィック 『男同士の絆』5 頁 (Sedgwick, *Between Men*, 4) 参照。

³⁸⁾ 拙論「イエスの胸に横たわる弟子」197-200 頁参照。

³⁹⁾ Eva Cantarella, *Bisexuality in the Ancient World*, translation from Italian by Cormac Ó Cuilleain, New Heaven: Yale University Press, 1992, with a preface to second edition, 2002, 97-119, 149-154, 217-222, et. al.; Craig A. Williams, *Roman Homosexuality: Ideologies of Masculinity in Classical Antiquity*, Ideologies of Desire, New York/Oxford: Oxford University Press, 1999, 15-61, 96-124; 本村凌二「ローマ帝国における『性』と家族」, 弓削達／伊藤貞夫編『ギリシアとローマ——古典古代の比較史的考察』河出書房新社, 1988 年, [275-300 頁] 287-296 頁, 同『ローマ人の愛と性』(講談社現代新書 1476) 講談社, 1999 年, 77-117 頁参照。

⁴⁰⁾ 拙論「『わたしを愛しているか』」39-66 頁, 同「イエスの胸に横たわる弟子」189-210 頁参照。